

# 隼人族の森を渡る風

## 鉄で本を彫刻する

認定こども園さすえからの依頼で制作したブロンズレリーフだったが、その原型を鹿児島県美術展に本の彫刻作品としてリメイクできないかと思い、全面的にレイアウトを試みた。

当初、絵本表紙は楠をチエーンソーでざっくり切ってすすめる予定だった。が、どうにもイメージに適合した形の材が見つからない。そこで搬入日が迫る中、楠を鉄に替えてつくることに決めた。そして溝辺の伊藤鉄工所に原型を持つていくことにしたのだった。伊藤鉄工所は杉アトリエの屋根を作つてくださった間柄なので、すぐに棟梁（社長）には理解を示していただけた。

プロの鉄工屋が切ると、上手すぎて線が自分の表現にならないと思い、また、自分の経験にもなるので、棟梁の不安の目を察しながら、なんとか自分で溶断させてもらつた。そして大体の本の形を、助けを借りながら斜めに立てるところまでこぎつけた。

その日は気分的には満足しながらも、ぐつたりと疲れて帰宅。夕食後ソフアでそのまま、うとうとと眠りこけた。心と眼覚め、何時かなと思った時である。まぶたの中が「ころころ」して、両目が痛い。やたら涙が流れ出て、薄目しか開けられなくなっていた。

思い当たることはただ一つ。溶断の光で眼を痛める、いわゆる「目玉焼き」。鉄工所の棟梁にボロボロ涙を流しながらT E Sして聞いてみた。「眼が開かん」とですが、「これは眼が火傷したとやろかいな?」

翌朝無事に世界が見えた。さーすがその道の経験者の言葉通りだと思つた。本のネームプレート部分はグラインダーとルーターを使って、実際に手仕事として『幸福の王子 オスカーワイルド』と彫り込んだ。グラインダーの鉄粉は燃えてなくなる確率が高いけれども、ルーターの粉じんは空氣中に漂うので、吸いすぎると危ないと思った。これを取り付ければ完成だなど思つていたら、表紙だけではなく、本の綴じ込みや、ページまでつくればいいよ! との周囲の彫刻仲間たちの声。

不慣れな鉄をなんとか形にしながらも作品にしたが、今度はどうしても、本の上に何かアクセントになるものが欲しくなる。タイムリミットを意識しながらも、小説の中に登場する空から降臨した天使のイメージをつくつてみた。

お陰様で結果は、第65回 鹿児島県美術展 会員の部 優秀賞。相談に応じてくれた皆様のご協力に感謝する。

還暦を過ぎたというのに、相変わらずタバタした仕事になってしまつた。

でもルートのない手探りの山登りの醍醐味にも似て、創作の道はやめられない。



伊藤鉄工所で鉄板を溶断中の筆者。



第65回鹿児島県美術展 彫刻会場風景と 作品「この世で最も貴きもの」